

## 主な【批評】

### 【国内】

#### 〈とりふね舞踏舎「献花」はホンモノだ〉

舞踏派グループの活動では、三上賀代の“とりふね舞踏舎”は、かねてから私が一目置いている数少ない集団の一つである。過去「私が生まれた日」や「ひのもと—ある晴れた、冬の日のお母さま」などにみられる、計算された緻密な構成は、主宰・演出家である三上宥起夫の力も大きい。ブトー作品の憑依的無為のおどしではなく、見せる作品に仕上がっているところが、他と一線を画している。しかしデビュー作「献花」は、なぜかこれまで未見だったので、急きょ出むいた。代表作といわれるだけあって、これはポスト土方に誕生した、ホンモノにランクされていい渾身の一本である。出だしの老婆からな生々しい紅衣の女への化身、シャンソン“あいのよろこび”に舞う夢のダンスが、突然崩壊して、実存の醜悪をさらけ出すプロセスなど、ブトー本来の自虐的爪痕が、ほとんど無傷のまま見事に継承されている。もっぱら魁異のスタイルだけに固執し、それを唯一の武器とする他の類似作とは比べものにならない。……

(【6行批評 7月2010】日下四郎「新 ダンスの窓から」安楽城出版 2012年2月28日)

『Sai』はとりふね舞踏舎の最高作ではないでしょうか。極寒の下北半島の放牧馬“寒立馬”、恐山やあの周辺の霊性を強く感じました。墓が庭やあぜ道にあり、といった印象、そこにある佇まい、祈りの形象…いいものを見ました)

(2012年初演「Sai」、お茶の水女子大学名誉教授、比較舞踊学会会長・森下はるみ)

### 【国外】

#### 1.<舞踏の教訓—信じがたいほど見事な作品〉

「素晴らしい、実に美しいイメージ。完璧な演技。カヨ・ミカミの一挙手一投足には息をのまずにはいられない。……安物の金ピカの衣装を着たり、裸になったり、あるいは灰の中を転げ回るというエロ・グロ、60年代の日本の前衛振付師たちは、舞踏であるということを知らしめるために様々な工夫を編み出した。だが、そんなものは必要ないのである。最早我々はそれで満足しない。昨日上演された“とりふね舞踏舎”の公演『献花』は、我々の目の前でそのことを示した。これこそが舞踏である。」

(1993年6月 フランス・「L'est Republicain」紙 Rachel VALENTIN)

2. 舞台上で繰り広げられる動きは、驚かせ、楽しませ、感動させ、そして仰天させた。これらは全て同時に押し寄せた。…大変ふるくからある公理が隠されている。見慣れているものを見入ると、予期しないものが見え、単純なものに見入ると、複雑なものが見え、小さいものに見入ると、大きなものが見えるこの<芸術の黄金の公式>を思い出させてくれた。…エレガントな身ぶりで表されている、人生哲学の舞踏を見ました。そして、それは素晴らしかった。(1994年6月 ロシア・「タ刊 PERMI」紙)

#### 3.<隠喩によって語られる日本の芸術〉

…終わりに至るまでに、カヨ・ミカミは確かに非常に強く激情と救済という感覚を創出する。あまねく部分に鮮烈なイメージがあった。…圧巻は、軽やかなピアノ演奏による「愛の喜び」を妨害するハーモニカの不協和音……。「献花」は明らかに誠実な作品である。

(1994年11月12日 アメリカ「New York Times」紙 Jannifer DUNNING)

#### 4.<三上賀代の百態〉

…見えるものの背後に潜む、霊、魂、あるいは情感などと呼ぶところの無形のものを表出させることはいつの時代でもあっても芸術の挑戦であり使命でもあった。その見えざる目標を求める人は希有でありまた尊重に値する。とはいえ、時々束の間であるけれどそれを掴むものもある。(いつも束の間なのだ)そして突然それを理解する。それは観客の一人一人に、別にまたいろいろな瞬間に起きる。先日の木曜日に日本の三上賀代の「献花」を見たセントラル劇場の間にもそれは起きた。ボルヘスがエル・アレフで獲得したのと同じ方法(有限の言葉の内に存在する無限性を表現する)で、賀代は本質を暴くのに成功している。…日本の舞踏を創始した土方巽という先達に理論と実践を学んだ賀代はそのキャリアを越えて舞踏の最前線を突破した。セビーリアのセントラル劇場の観客の反応は日本の舞踏家の動きと表情に実際圧倒され、芸術の最前線は仮構の中にあると再認識させられたのである。

(1996年6月8日 スペイン「EL CORREO」紙 Rosalia GOMEZ)

5.ここにあるのは、完璧な調和の下に置かれた動作であり、身体的反応と情感と思考との三位一体化である。それは、演技を超えた、存在そのものであるとしか言いようのない、ある特権的な状態である。

(1999年8月20日 エジンバラ演劇祭「HERALD」紙 Mary Brennan)

## 6. <「献花」、「寒立馬」> サミュエル・ベケット劇場 TCD

…随所において、三上は高度の身体的・精神的力量を発揮し、見る者に、人間の肉体は精気によってではなく、悲哀によって生動するという事実を納得させた。ある時は、機械仕掛けで舞台上を移動しているかと思わせるほど遅い速度で動くため、見ている者は苦痛を感じるほどであった。またある時は、演者自身もどうすることも出来ないと思われるほどの狂乱振りを示す。舞踏によく見られる白塗りの顔と白塗りの体は、破天荒な身振りとあいまって、死ぬに死ねない、生命を超越した巨大な力に翻弄される死体が持っている、不気味な印象を伝えることに成功した。

後半の作品「寒立馬」では、アイルランドの舞台芸術家たちが「とりふね舞踏舎」の舞踏家たちと共演した。タイトルの「寒立馬」は、日本の寒冷地帯で過酷な冬を過ごす野生馬にちなんで名づけられたものである。超スローモーの動きがあり、頑ななまでに形式的な身体表現があり、混沌たる振り付けと演出があり、演技者たちの極端なまでの顔面演技と擦れた顔の表情がある。…白塗りの顔と、絶え間なく変化する仮面のような顔つき。まるで顔さえが踊っているかのように見えた。

(クリスティーン・マドン 「アイリッシュ・タイムズ」2004年2月21日)

## 7. とりふね舞踏舎サミュエル・ベケット劇場で特別公演

### 滅びゆく亡骸の無限の悲しみ—舞踏が作り出す驚異の風景

…舞踏において、踊り手はまったき自己放棄を目指している。そこでは、踊り手の肉体は、脆い空虚な抜け殻にすぎない。体全体が、あるいはその一部が、凍りつき、死に絶えた後に、必死で動き出そうとする。踊り手は自己のペルソナを訴えようともせず、特定の観念を伝えようともしない。踊り手が求めるのは、見る者の一人ひとりの中に、それぞれの主観的感情・思想・印象を引き起こす媒体となろうとすることのみである。踊り手たちの衣装は、観客が作品を自由に解釈する仲立ちとなっている。そこには、日常生活を連想させるものが一切なく、時には全裸に近いまでに踊り手たちの肉体を観客の目に晒す。わけても、己を捨ててひたすら身体を観客に晒す三上賀代の演技は、圧倒的である。アイルランド側の出演者も、魂を脱いた肉体が何を表現できるかを示す程度には善戦したと言ってよいだろう。同時に観客の側も、戦争という有無を言わせぬ力を越えたところに存在する光景を眺める機会を与えられた。そこにあるのは、滅びゆく亡骸たちがそれぞれに持つ、かけがえのない無限の悲しみの姿であった。

(リーカ・ジョークナイン 「トリニティー・ニュース」2004年3月2日)

### 【国内】

#### <とりふね舞踏舎「献花」はホンモノだ>

舞踏派グループの活動では、三上賀代の“とりふね舞踏舎”は、かねてから私が一目置いている数少ない集団の一つである。過去「私が生まれた日」や「ひのもと—ある晴れた、冬の日のお母さま」などにみられる、計算された緻密な構成は、主宰・演出家である三上育起夫の力も大きいですが、ブトー作品の憑依的無為のおどしではなく、見せる作品に仕上がっているところが、他と一線を画している。しかしデビュー作「献花」は、なぜかこれまで未見だったので、急きょ出むいた。代表作といわれるだけあって、これはポスト土方に誕生した、ホンモノにランクされているいい渾身の一本である。出だしの老婆からな生々しい紅衣の女への化身、シャンソン“あいのよろこび”に舞う夢のダンスが、突然崩壊して、実存の醜悪をさらけ出すプロセスなど、ブトー本来の自虐的爪痕が、ほとんど無傷のまま見事に継承されている。もっぱら魁異のスタイルだけに固執し、それを唯一の武器とする他の類似作とは比べものにならない。……

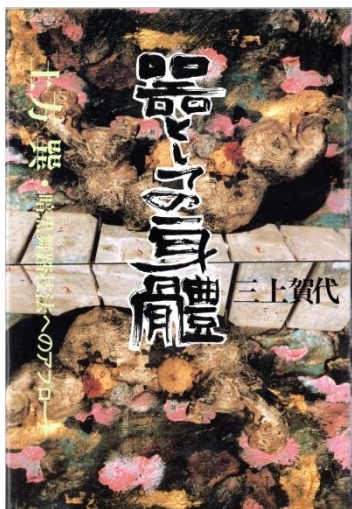
(【6行批評 7月2010】日下四郎「新 ダンスの窓から」安楽城出版 2012年2月28日)

『Sai』はとりふね舞踏舎の最高作ではないでしょうか。極寒の下北半島の放牧馬“寒立馬”、恐山やあの周辺の靈性を強く感じました。墓が庭やあぜ道にあり、といった印象、そこにある佇まい、祈りの形象…いいものを見ました)

(2012年初演「Sai」、お茶の水女子大学名誉教授、比較舞踊学会会長・森下はるみ)

●三上賀代の舞踏本●

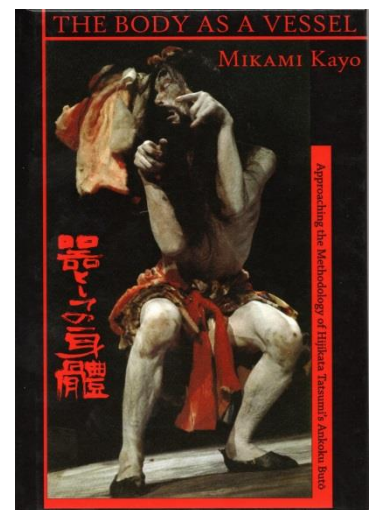
『器としての身体-土方巽・暗黒舞踏技法へのアプローチ』(修士論文..ANZ 堂)  
 『増補改訂 器としての身体-土方巽・暗黒舞踏技法へのアプローチ』(博士論文.春風社.)  
[info@shumpu.com](mailto:info@shumpu.com)  
 『The Body as a Vessel』 translator: Rosa van Hensbergen(UK, Ozaru Books.)  
<http://ozaru.net/ozarubooks/vessel.html>



1993年版



『増補改訂』版 2015年



翻訳版 2016年

【書評】

●「三上賀代が、土方の下にいた足掛け 4 年間の体験と、その時記した膨大な稽古ノートをもとに、暗黒舞踏を踊るための技法を言語化することを試みた…本書で知ることは、観客である我々に、舞踏に対する全く別の視線を与える」(『TOKYO ARTSCENE』誌(1993年)) ●「土方巽の創始した暗黒舞踏をその技法的側面から解き明かそうとしたものである。これまで舞踏家の著書や、写真集、舞踏評論などはあったが、本書のように稽古ノ-

トなどの現場資料を駆使して、いかに舞踏は生まれたかを探ろうとするものはなかった。その意味でも本書は画期的な資料価値があり、また私たち舞踏家にとっては、より緻密な身体訓練をする上で格好のテキストとなりうる」(『自由時間』(1993.『マガジンハウス』)●「推理小説のような謎解きの面白さ」(『週刊文春』1993年)●「特に4章(舞踏技法)以降は我々外部の者には立ち入ることが出来ない領域」(舞踊評論家・市川雅)●「三上さんの書かれた『器としての身体』は、土方について書かれたもののなかで、いちばん信頼のおけるもののように思われる」(舞踏家・室伏鴻)